

フィレンツェの高校生

山下史路

新潮社

Yama Shiro

著者略歴

浜松市立高校卒。81年より社会人のための学習の場「練馬市民大学」を設立。

82年から86年まで練馬文化センター評議委員、また88年からは「山下サロン」を主催し、サロンコンサートを主催するなど、地域レベルの文化活動が続ける。89年よりイタリアの福祉・社会制度調査のため渡伊すること多数。

フィレンツェの高校生

著者／^{やましたふみじ}山下史路

*

発行／1994年1月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・営業部03(3266)5111・編集部03(3266)5411

*

印刷所／錦明印刷株式会社

製本所／大口製本印刷株式会社

*

価格はカバーに表示してあります

© Fumiji Yamashita 1994, Printed in Japan

ISBN4-10-396101-5 C0037

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

フィレンツェの高校生※目次

1	十五の春をフイレンツェで	7
2	香水とカプチーノ	20
3	真夜中のサッカー	28
4	ヴェネツィアのおじいちゃん	36
5	ミケランジェロの家の前の高校	49
6	いきなり授業、いきなり学級委員	55
7	恐怖の口頭試問	61
8	デイスコへ行きなさい	66
9	フレスコ画とたかり屋大家	71
10	帰ろう帰らない	81
11	老舗毛皮屋家族	84
12	土曜の夜のピアツァとピツァ	100

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	
ヴァカンツァと貯蓄率	考える洗濯機	コンプレックスと自信過剰と	ドラッグ、マフィア、そしてパーパ	美しきイタリアの旅	ブランドファッションは市場で	イタリア料理はダイエツト?	音楽の国イタリアはいま……	トティはオテツロの末裔だった	親子はハナレナイ、ハナレナイ	ルネッサンス精神こそ国際人	ながーいあとがき
106	114	124	128	136	155	165	174	180	193	198	206

装画／志賀 功
装幀／新潮社装幀室

フィレンツェの高校生

1 十五の春をフィレンツェで

「ぼく来年、イタリアへ留学したいんだけど……。だからイタリア語の勉強を秋から始めたいんだ」

白い包帯だらけの顔で、息子が中学三年の夏、突然言い出した。「えっ」と私は内心びっくりした。

三週間ほど前に学校の遠足でケガをし、口の中を十針、目の下を九針、鼻の下を二針縫い、その上前歯を根元から一本折り、顔中が腫れ上がり、痛みも退いていない息子が、ベッドに横たわりながら、何か決心したような、思い詰めたような強い目で言った。

それまで私も「大学生になったら留学もいいわね」などと、軽い気持ちで留学を口にしたことはあったが、高校留学なんて思いも、考えもしなかった。高校留学だなんて早すぎる。いつも子供の方が、親の想像を越えたことを言う。一瞬「困ったことになった」と、焦った。

しかし、目の前の痛々しい彼の姿を見ると、「ダメ」とは言えない。ともかく今は傷を治すことに専念できるよう、あまり気分を高ぶらせるようなことは言わない方がいいと、とっさに

判断した。

このケガのために、以前から楽しみにしていた夏休みのイタリア旅行も、彼は棒に振っていた。「イタリアへは、また冬休みとか春休みに行けるでしょう。傷が治れば……。イタリア語のレッスンに通うのは、いいと思うわよ。ママがカルチャーセンターのパンフレットを取り寄せてあげるから。まあ留学についてはパパともゆっくり相談しましょう」

と、その場をアタフタと繕った。

正直なところ、彼が本気で留学を考えているのなら、大変なことだと思う一方、顔に大ケガをし、何かから必死で立ち上がろうとしている健気な息子を、母親として素直に応援してやりたいとも思い、複雑な気持ちだった。

その場で「なぜイタリアなの」、「なぜ留学なの」とは聞かなかった。私は何か怖いものに触れるようで、聞けなかったのだ。

というのも、数年来、私はイタリアに強い思い入れがあり、イタリアの音楽、美術、歴史はもちろんのこと、現代イタリアの福祉や社会制度について本を読んだり、ヴェネツィアへ調べに行ったりしていた。

こんな母親でも、息子は見えてくれたのだという嬉しい思いと同時に、男の子だから、日本の平均的高校生のレールを外さない方がいいのではないかと、もし留学すれば、彼の人生が大きく変わってしまうのではないか、という不安が心の中で湧いた。そして、もし息子の留学希望が私の影響であるならば、責任は重大でとても気が重かった。

当時、私たちの一人息子^{ひろし}完は、東京大学教育学部附属中学校に通っていた。中高一貫教育の自由な雰囲気^{ひろし}の学校である。

この中学校に入る前、彼は小学校六年の一年間を、塾通いした。

夫も私も東京人ではなく、東京の学校事情、受験事情に疎く、中学受験など頭になかった。ばかりしいとさえ思っていた。

ところが、六年生になったばかりの完が、

「クラスの友だちが何人も、中学受験をするために塾に行ってるんだよ。ほくも中学受験をしたいから塾に行かせて」と言い出した。

それまで、中学は当然地元の公立校だとばかり思っていた私たちは、この時も驚かされた。

受験は高校と大学だけでたくさんだと思っていたからだ。小さな子供たちが、夜遅くまで塾通いしなければ合格できないような受験内容やシステム、そして、『塾』がみごとに一大産業となっていることに強い抵抗があったため、「我が子が塾通い」などと考えただけで、嫌な気分がした。

しかし完は、仲の良いクラスメイトたちと同じようにチャレンジしたがつた。

この受験に意味があるかどうかという問題はさておき、息子が受験のためとはいえ、勉強したいと言っているのならば、しぶしぶ塾通いを許した。

また夫も私も音楽が好きで、その上私はピアノ、ヴァイオリン、フルート、エレクトーン等数

人の先生を集め、音楽教室を開いていたので、完には三歳の終わり頃からピアノを習わせていた。私たちは完が音楽を聴いたり、楽器が弾けるようになることが重要でかつ意味があると考えていた。音楽の道に進まなくとも。だからピアノは止めないという約束で、彼は塾通いを始めた。塾でもらう中学受験の資料から、受験生はもろんのこと、父母たち、塾の先生方の受験に賭ける熱狂的な姿を知るにつけ、戸惑いを感じたものだ。ある日、塾の父母面談の折、塾の先生方が、「いい中学校に合格するためには、小六からの準備では遅すぎます」と言った。私は「今まで中学受験をさせる気はありませんでしたし、教育産業にも乗せたくはありませんでした。今でも抵抗があります」と答えたのをはつきり覚えていいる。塾の月謝を完に持たせる時、毎回「まだ今月も通うの」と問い質していたぐらいだ。

暑い夏休みも、雪の降る寒い冬の夜も、完は遅くまで塾に通った。小学校最後のお正月を終えると、私立のA校と東大附属中学校の二校を受験し、東大附属に合格した。

塾の先生方は、またまた「東附は中高一貫でも受験校ではないから、のんびりしていて、大学受験のためには良くないですよ。地元の中学に通って、高校受験のために塾通いした方がいいですな」と言った。

反対に私たちは、中高一貫ののんびりした自由な雰囲気の中附が気に入った。

中学に行き、完は野球部に入った。早朝練習のために、一人で早起きをし、放課後も遅くまで部活に熱中した。

塾通いといい、野球部といい、自分が言い出し決定したことは、親に言われなくとも、物事を

どんどん進めていく彼の性格に、私たちは苦笑させられたものだ。

順調にゆくかと思われた部活も、中学二年生の時、股の肉離れを起こし専門医に診てもらったところ、意外なことが発見され、挫折した。

「背骨と骨盤を接続する部分の骨が完全に発達していないので、もしこのまま野球を続けると、一年後にはひどい腰痛になりますよ。野球はもう止めた方がいいでしょう」と、お医者様に宣告されたのだ。

ちょうどその頃、完の従姉が、バレーボールのし過ぎから激しい腰痛に襲われ、入院していたこともあり、私たちは青ざめた。

しかし完にとって、大好きな野球ができなくなることは、この世が真つ暗になったように思えたようだ。

即刻、私たちは彼に野球部を止めるよう、説得を開始した。

野球ばかりが人生ではないこと、世の中には他にも面白いことがあること、また新しく熱中できるものが見つかるだろうこと、私も体を悪くし、大好きな歌を諦めなければならぬ時期があったことなど、必死で話をした。病気にだけはなつて欲しくなかったからだ。彼は涙をポロポロ流して聞いていた。

この一年、完は災難続きであった。先にも書いたように、中三の夏の遠足で、サイクリングロードの下り坂を自転車で行っていた時のことだった。田舎道で草に覆われていたため側溝が見え

ず、U字溝にタイヤをつっこみ、体を三メートルも飛ばされ、コンクリート道路の上に叩きつけられた。気を失った彼を、一緒に走っていた友人や、通りがかりの人たちが、救急病院まで運んでくれた。

普通、この程度のケガでは済まなかっただろうが、若くて身体が柔軟であつたためか、野球をしていて運動神経が発達していたためか、小難で済んだのだろう。

こういった事情から、完のイタリア語を始めたい、留学をしたいという気持ちは、私にはとても良く解つた。それはケガをして寝ている間に一人で考え、見つけた新しい目標だということが。

顔の腫れが退き、傷のようすも落ち着いてくると、我が家も冷静さを取り戻していった。ただ男の子とはいえ、顔に二カ所も傷が残るのかと思うと、私の心は毎日痛んでいたが。

夏休みも終わり頃、取り寄せたイタリア語講座のパンフレットを見ながら、夫と三人で話し合うことにした。

私はこわごわ質問した。

「なぜ留学したいの。なぜイタリアなの」

すると待つてましたとばかりに彼は答えた。

「それはね、同じクラスに帰国子女がいてね、英語がペラペラなんだ。お父さんの仕事の都合で数年間アメリカにいたらしいんだよ。英語の授業の時なんか、先生がニュアンスのことを聞くぐ

らいなんだ、その子にね。すると彼女はちゃんと答えられるの。胸がスカッとするぐらいだよ。カッコいいんだから」

「へえー」

私たちは見たことのないその女の子を想像し、自分たちの子供の頃とは随分環境が違うのかなあと、思った。私たちの中学生時代には、まだ帰国子女はいなかったものだ。

「最近是从姉のY子ちゃんのように、親の転勤で海外の学校に行く人は多いでしょ。それを見て、ほくも留学してみたいなあと、ずっと思っていたんだ。アメリカとか、オーストラリアとか、英語圏に行く人が多いから、今はもう英語を話せる人はたくさんいるよ、常識みたいに。ほくも授業の中では一番英語が好きだから、もちろん英語にも強くなりたいけど、もう一カ国語マスターしたいんだ。今までは日本もアメリカばかり見てたけど、これからはヨーロッパが注目されるでしょ」

「EC統合があるからなあ」と夫。

近頃は我が家でも、EC関連の話題がよく食卓に上っていた。効率主義、合理主義一辺倒のアメリカより、まだ伝統と深みのあるヨーロッパの方が、私たちには興味があつたし、好ましく思えた。

「留学といっても、一、二カ月のものから、高校を卒業するまでの長期のものまであるでしょう。それから高校生は一年間の交換留学というのがあるわよね。完はどの程度考えているの」と私。「できることならば長い方がいいけど……。短くても一年は行きたいなあ」

「こういうことはあまり言いたくはないんだけど……、完は男の子だから、将来仕事に就く時のことまで考えて、行動した方がいいと思うのよね」

「どういふこと」

「日本の会社は、日本の大学を出ていないと、入社は難しいらしいわよ」

なんだか夢のない話だなあといいながら、サラリーマンの我が家では仕方がないと、私は話を続けた。

「日本の大学に入るためには、一年休学して、留学後は日本の高校に戻り大学受験するか、海外の高校卒業資格を取って、帰国子女枠にチャレンジするか、の二つに一つしか道はないらしいの」

「最近帰国子女が年々増えているから、その枠も厳しいらしいぞ」

「日本の会社も大学も、そのうち変わるかもしれないじゃない」

「いや、なかなか変わらないよ。日本という国は」

「高校になると、日本語で授業を受けるのも難しくなるのに、外国語で授業を受けるなんて、大変なのは当然でしょう。なのにこの頃は、気軽に、なんとかなると高校留学する人が増えているらしいけど、結局授業についてゆけず、中途半端で戻ってくる人が多いんですって。一年以上過ぎていけば、日本の高校は受け入れてはくれないし、卒業してなければ、大学にも入れないし……という人が、結構いるらしいから……。一年で東附に戻った方がいいと思うわ」

「わかったよ」

完は、初めて聞かされた現実社会に、うんざりしたような顔をした。しかし、私はこれだけは